

1 **キリスト教神学**
第5章 キリスト教のメッセージの今日化
一宮基督教研究所
安黒務

2 「キリスト教神学」

概略

- ①
1. 神を研究すること
 2. 神を知ること
 3. 神はどのような方か
 4. 神は何をなされるか
 5. 人間
 6. 罪
- ②
7. キリストの人格
 8. キリストのみわざ
 9. 聖霊
 10. 救い
 11. 教会
 12. 終末

3 **第1部 神を研究すること**

概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

4 **序**

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

5 **第5章 キリスト教のメッセージを
今日化すること: 概略**

1. 時代遅れへの挑戦
2. キリスト教における永続性の領域
 1. 制度・組織
 2. 神のみわざ
 3. 経験
 4. 教理
 5. 生活様式
3. 神学を今日化する二つのアプローチ
 1. 改変者
 2. 翻訳者
4. 永続性の基準
 1. 諸文化を超えた恒常性
 2. 普遍性を示す環境・状況
 3. 基盤として認められた永続的要素
 4. 本質的なものとみなされた経験との確固とした結びつき
 5. 漸進的啓示の中で最終的位置を占めていること

6 第1節 時代遅れへの挑戦

1. 聖書の世界と現代世界の明らかな相違
2. プルトマン『新約聖書と神話論』
3. ユダヤ教の黙示文学・グノーシス神話
4. 三層からなる世界観
5. 二つの異なった世界に生きている

7 第2節 キリスト教における永続性の領域

- プルトマン：時代遅れの概念の変革
1. 制度・組織：カトリック
 2. 神のみわざ
 1. 聖書記事は規範的なものではない
 2. 出エジプトとキリストの出来事
 3. 聖書の説明ではない
 3. 経験：フォスディック
 1. 不死の望みの表現
 2. 教理の保持は必要ではない
 4. 教理：メイチェン
 1. 特定の教理
 2. 経験は教理的真理なしには不可能
 5. 生活様式：ラウシェンバッハ
 1. 特定の生活様式・倫理
 2. 神の支配：社会的理想
 3. 地上における神の国

8 第3節 神学を今日化する二つのアプローチ 改変者

1. 信仰箇条：従属変数、知的環境：独立定数
2. 古い信仰箇条を今日化するモダニスト
3. 人間：時の経過とともに急激な変化
4. 真理：相対的なもの
5. 神の死の神学
6. 「神」という言葉の非現実性
7. ボンヘッフアー：「成人した世界」
8. 神不在の経験
9. アルタイザー：超越的な神の死の強調
10. 徹底的な世俗的信仰

9 第3節 神学を今日化する二つのアプローチ 翻訳者

1. 改変者は別のメッセージと取り替えた
2. 敷衍(ふえん)訳・綿畑訳
3. 基準は人間ではない
4. メッセージと解釈・伝承とは区別
5. 啓示は特別な状況で与えられた
6. 問題を包括的に語っていない
7. 一般啓示に関する最近の研究
8. 現代人に意味をもたない場合
9. 本質的な内容を保持しつつ今日的な形で
10. 言語における同義語
11. 椅子に触れ、壁に触れ
12. 永遠の真理に、新しい具体的な表現を

10 第4節 永続性の基準

1. 諸文化を超えた恒常性
 1. 一貫したもの、教理の本質
 2. 犠牲による贖いの原則
2. 普遍性を示す環境・状況
 1. 大宣教命令における洗礼
 2. 洗足の記事：しもへの態度、謙遜
3. 基盤として認められた永続的要素
 - 結婚の永続性、万人祭司性

4. 本質的なものと見なされた経験との確固とした結びつき
 - “ケシヒテ。”と“ヒストリエ。”
5. 漸進的啓示の中での最終的位置を占めていること
 1. 漸進的啓示の問題との関係
 2. 社会における女性の地位、奴隷の異例の立場

11



まとめ

1. ハルナック：「文化的行李を捨てる」
2. その基礎となっている真理は何か
3. 教えを言明する形式と教えの永続的な本質とを同一視しない
4. 聖書の言明そのものから本質を引き出すべき